

雪国の持続的発展を目指して

～空き家を拠点とした冬季間におけるアートプロジェクト～

愛知大学地域政策学部 西堀喜久夫ゼミ

代表者：吉川弘人 発表者：吉川弘人、竹本甲歩

参加者：池谷悠、伊豆原梨花、佐藤祐基、関野宏紀、祖父江亮太、野呂美穂、福田敬亮、持塚梨菜、渡邊希、平野佑汰

梗概

今回“みんな雪のおかげ”のテーマ解題として「雪のイメージ進展」「雪を利活用した地域活性化」が求められた。対象地となった津南町は日本有数の豪雪地帯であり人口減少・人口流出・少子高齢化といったように過疎化が進行していた。西堀ゼミは数ある地域課題の中で雪国という観点において空き家問題に着目した。他地域と比較した際に、冬季間における雪害等、最も負担のある分野だと考えたからだ。実際、除雪のためのコストなど負担が大きいことが判明した。そこで今回、空き家を利活用した地域活性化を図る必要があると考えた。本論では空き家を活用して幅広い交流人口の拡大を図っている事例としてギルドハウス十日町を取り上げた。また空き家活用の具体的手段としてアートに着目した。津南町は国内最大規模の芸術祭である「大地の芸術祭」の開催地であり、そこで取り入れられている現代アートは多様な価値観の受け皿となり得ている且つ地域の歴史文化や産業など地域資源のすべてを包括し新たな魅力を生み出すことのできる創造性を含んでいる点から、地域活性化に有用な手段だと考えたからだ。またこのとき、集落内での結束の強さや独自の文化など、雪は津南町のような雪国の地域性を育んできた要因ということができ、開催期間として冬季間が最適ではないかと考えた。

以上のようなことから、冬季間の空き家を拠点とした雪アートプロジェクトを提案する。このとき、1集落につき1件の空き家、1つの雪アート作品と仮定している。まず空き家の管理は町の役割であり、町役場が選定した空き家を地域内外問わずに“住み開き”という形で開放し、幅広い交流人口の拡大を促す。雪アートプロジェクトは大地の芸術祭冬の一貫として行うものであり、地域活性化という目的を達成するために「アーティストは開催期間空き家に住むこと」「住民が参加し空き家の雪下ろしで下した雪を使用すること」を条件とする。これらを実現することで、より確実的な、アーティスト・地域住民・サポーター（こへび隊）・訪問者のコミュニケーションを促すことができる。そこにアート作品自体の価値も加わり、地域住民は雪という地域資源の魅力を再発見でき、雪のイメージ進展に寄与することができる。また交流人口の拡大により、付随効果として定住を見込んだ人口流入を促すことができるなど、地域活性化にも寄与することができ、住民の意識が今回のテーマである“みんな雪のおかげ”となることを確信している。

はじめに

津南町の人々にとって雪は地域発展の大きな足かせであった。我々が宿泊した結束集落は、かつては冬季は雪に閉ざされた地域であったが、今は豪雪期でも除雪や道路整備がされ、かつての孤立集落という状況はなくなっている。しかし、過疎化が進行し、近い将来消滅可能性がある地域の人々は心配していた。このことをどう考えたらよいのだろうか。

雪に閉じ込められた生活は近代的な生活へと発展したが、新たな地域問題が生じているのであ

る。今求められるのは、克雪政策の一定の成果の上に立った、地域の魅力をどう高め、定住につながる政策をどう生み出していくか、という新しい地域イノベーションが必要と思われる。

テーマ解題

津南町役場への事前の電話調査より、本論のテーマである“みんな雪のおかげ”について趣旨を伺ったところ、以下のような見解であった。

降雪地域にとって雪は、貴重な資源でもあり大きな負担でもある。つまりプラス面とマイナス面の両面を併せ持っているといえる。しかし、漠然たるフィーリングとしてはマイナス面が強く感じられがちである。今回のテーマ設定にあたっては、政策提案の望まれる最終到達点として“みんな雪のおかげ”と称した。つまり住民の内面に根差した雪へのマイナスイメージをプラスイメージへと進展させることである。

また津南町は「人口減少」「人口流出」「少子高齢化」が顕著であり、町としての衰退が懸念されている。そのため、津南町としては町内の活性化を望んでいる。活性化を考える過程において、津南町と雪は切っても切れぬ関係にあると考えている。

以上のようなことから、今回のテーマ解題として「雪を利活用して地域活性化に有用する」ことが最善たる手法ではないかと考えた。

調査概要

先行研究・提案を行うに当たり、文献や資料の収集の他、津南町役場の総務課・建設課、観光協会、結束集落、商店街周辺等現地で行った職員や住民計 15 名への口頭ヒアリング調査や電話調査で得られた情報を用い現状分析を行った。また大地の芸術祭 2016 夏の視察を行った。

1.現状分析

1-1.津南町の概要

津南町は新潟県南部に位置し、長野県北部に接している。また新潟県魚沼郡に属し、約 80 の集落から成る町である。現地調査の際には、新幹線で東京駅から越後湯沢駅まで約 1 時間 20 分、車で越後湯沢駅から町の中心部までは約 1 時間でアクセスすることができた。

夏は北西の涼風に恵まれ高原性のさわやかな気候が続く反面、国内有数の豪雪地帯であり年間累積降雪量・積雪量が非常に多い。その雪解け水を利用しての「魚沼産コシヒカリ」の生産が盛んである。また河岸段丘や棚田など豊かな自然資源に恵まれた緑豊かな町であり、特に段丘上では 1 万数千年前から人々が生活していた痕跡があるなど縄文時代の遺跡が数多く残されている。

1-2.人口動向

津南町の人口は毎年減少傾向にあり、かつては 21,909 人（昭和 30 年）が暮らしていたが現在人口は 10,881 人（平成 22 年）まで減少している。要因として、進学や就職を機に 20~24 歳の若年層を中心とした社会減と自然減の並行進行、それに伴う出生率の低下が挙げられる。このように若年層がピーク時の 37%（昭和 30 年）から 11%（平成 22 年）と約 25%も減少しており、少子化率の進行が伺える。また高齢化率も平成 22 年度時点で 37%と全国平均（25.1%）を大幅に上回っていることから、津南町は「人口減少」「人口流出」「少子高齢化」が進行していることが伺えた。

1-3.空き家の課題性

過疎化による地域課題はいくつか挙げられるが、西堀ゼミは中でも空き家問題に注目する。雪という観点において、他地域に比べ最も負担の出る分野だと推測したからだ。

空き家は人口減少に伴い増加しており、町内には複数の空き家が点在している。町としては津南町移住推進協議会が空き家情報の公開やお試し移住体験ハウスの設置を試みているが、今や空き家の増加は全国的な問題となっているが故に他にも同じような政策を実施して競争力ある自治体が多く、競争力に欠ける。このような中で空き家は減りづらく、町の人口減少の象徴となってしまっている。

特に積雪期間は除雪をはじめとした高額なランニングコスト、参考としては業者委託で1回1件5000円～など、が発生しているにも関わらず使用者がいないため、建物の必要性がますます問われるところだ。平成20年時点では、新潟県は住宅ストックのうち約12%が空き家であり、木造に限ると5.4%と全国平均(4.2%)を上回る。賃貸又は売却の予定が無く、別荘等でもない空き家であり、居住世帯が長期にわたって不在の住宅や建て替えなどのために取り壊すことになっている住宅は、他の区分と比べ管理が不十分になりがちであるが、津南町はそれに当てはまる「全く使用していない空き家」が89件と、町内の1集落に1件はある換算であり一刻も早い対策が求められる。以上のようなことから、空き家の利活用を考える必要があると考えた。

□調査結果〔調査区域：町内全域（集落単位）〕

空き家総数		306	公共用施設含む
内	住宅	274	
	その他	32	物置等
	倒壊危険数	20	防災担当通知済
	全く使用していない空き家	89	
訳	住宅のうち再利用可能	250	
	空き家のうち貸し出し可能	38	
	空き家のうち売却可能	22	

H21.3.9 入居可能な空き家に関する調査協力

- ・貸し出し可能な空き家 10
 - ・売却可能な空き家 6
- } 重複あり

(H21.3 現在)

(出典：平成21年津南町空き家実態調査概要)

2.事例調査

2-1.ギルドハウス十日町の事例

そこで今回、新潟県十日町市の津池集落という、津南町と類似した環境で行われている空き家の活用法に注目した。ギルドハウス十日町とはシェア古民家であり、ギルドとは中世ヨーロッパに実在した協同組合のことをいう。特徴として、一般的な営利目的のシェアハウスではなく、その概念を超えて、住人のみならず地域の内外から多様な人たちが集う場として、住まいを開放して交流空間とする「住み開き」を行っている点にある。まちづくりにたずさわりたい、田舎暮らしを体験したい、地方に移住したい、多拠点居住のひとつのセカンドハウスやリモートワークのためのコワーキングスペースとして利用したい、イベントを企画してさまざまな地域の方と知り

合いたいなど、多様なニーズに対応し、交流移住希望者や旅行者など幅広く受け入れている。またその担い手は定住を選択した住人や地域住民である。2015年にオープン後1年間で全国各地や海外から延べ3,000人が訪れている実績があり、このとき、立地がこのような山に囲まれた限界集落にあることで、「ギルドハウス十日町」に強い興味を持つ人しか訪れないことは、より人がつながりやすい要素であるといえる。

実際に、ギルドハウスへの訪問客が現地の雪まつりの雪像づくりに携わったり、住人が地域住民に田んぼを貸してもらい米づくりを行ったり、そのエネルギーはまちにも波及し、まさに人がつながる家とまちとなり得ている。

また現在は「ギルドハウストークョー」もオープンしており、都市と地方どうしがつながりながら、出会いから共感や展開が生まれることが期待できる。

このように空き家を「住み開き」という形で開放することで、人の流動性が作り出され、人々が仕事やソーシャルアクションを生み、地域に求められるような拠点づくりを担う人材となっている。また他にも付随効果として交流人口の拡大、人口流入などがみられ、地域を支える人材づくりに有用であるといえる。

このようなことから空き家はマイナス資源としてではなく、人を呼び込めるストックとして捉えることができ、地域活性化に有用であるといえる。

2-2.大地の芸術祭の事例

また、空き家活用の具体的手段としてアートに着目した。津南町は国内最大規模の芸術祭である「大地の芸術祭」の開催地に含まれており、うまくアプローチできないかと考えた。

大地の芸術祭は、越後妻有地方（新潟県十日町市、津南町）を舞台に、2000年から3年に1度開催されている世界最大規模の国際芸術祭である。地域に内在するさまざまな自然資源を中心とした価値を、アートを媒介として掘り起こし、その魅力を高め、世界に発信し、地域再生の道筋を築くことを目指している。例えば廃校を美術館に改修した「絵本と木の実の美術館」、信濃川の支流を含む風景を窓の中に映し出した「たくさんの失われた窓のために」がある。またこのアートプロジェクトは『雪国の、田舎で行われる、現代アートが中心の、お祭り』ともコンセプトづけされており、これは地域住民の雪国での暮らしの本質に帰するものであるといえる。

地域活性化に有効な手法として、以下に特化している。

地域資源の再発掘：地域住民にとって、見慣れた当たり前の風景、季節の経巡りを、有効な地域資源として活用し、作品の奥に広がる風景を際立たせるなど、アートを通じ魅力を引き出すことで、地域の持続的発展に寄与している。

協働型社会の実現：参加者であるアーティスト・地域住民・サポーター（こへび隊）・訪問者が地域・世代・ジャンルを超えて交流している。その中で、地域住民が自分たちの住む地域の魅力の再発見と新しい活性化策を模索することになる。

経済波及効果：開催地域外からの集客も見込めることは、社会関係資本の形成にもつながっている。2012年の本祭では488,848人もが訪れ、その経済効果は46億円に上るといわれている。また空き家や廃校がギャラリー、宿泊施設、レストランなどとして再生し、地域に雇用をもたらしている。

以上のように、大地の芸術祭は世界的発信力や外部支援等、地域づくり手法として、土壌は非常に整っていること、住民に町への愛着と誇りの醸成によるイメージ進展を促すことに有用であるといえる。同様に現代アートは、多様で幅広い価値観の受け皿となり得ており、地域の歴史文化や産業など地域資源のすべてを包括し、かつ活かしたまま、新たな魅力を生み出すことのできる

る創造性、可能性があることが分かる。

しかし津南町は現状として、その事例である大地の芸術祭の開催地域に含まれながら、ヒアリング調査では多くの住民が「参加している実感はない。芸術祭の開催前後で町に変化は無いように感じる。」と回答し、地域住民に対する事業波及効果の欠如が伺えた。また津南町は基本構想にて「観光業の方向性が不透明である」「大地の芸術祭の波及効果を地域活性化に反映できていない」との言及があった。津南町の産業分類別就業者における観光（サービス）のウェイトは平成 22 年度時点で全産業の約 3 割（29.90%）と、最も高い構成比を占めており、このような現状は打開する必要がある。

たしかに、他地域は域内にアートが点在しているのが特徴としてあるが、津南町は J R 飯山線沿いにアート作品が置かれており、町内にはわずかであることが挙げられる。そのため大地の芸術祭に関わっているのは現状、行政職員とアート作品が置かれている一部の集落にとどまっている。今回提案する「雪アート」を導入することによって、津南町が住民単位で、まだ介入の余地がある大地の芸術祭へ参加するきっかけづくりとなり得ると見込んでいる。

このようなことから、「空き家を利用してアートプロジェクトを行うこと」が今回のテーマ解題に資すると考える。

3.政策提言

3-1.開催期間について

開催時期として、冬季間が最適ではないかと考えた。

津南町は 1 年のうち 5 か月近くを雪に覆われ、最高 3~4m の雪が積もる。準備段階として 11 月の雪囲い（屋根から落ちてきた雪が家屋を破壊することを防ぐ雪垣の設置）から始まり、早いと同月のはじめに初雪が降る。根雪になるのは 12 月の終わり、町場の雪が完全に解けて無くなるのは 5 月間近である。またこのとき、祭事や民謡など住民間で伝承された独自の文化が育まれてきた。例えば、1 月には正月、小正月、鳥追い、20 日正月と 4 回行事が行われたり、伝統工芸である作飾りが作られたりしている。また集落内の結束の強さは、豪雪の厳しい環境の中で育まれてきた相互扶助関係によるものであり、津南町は雪と共存しており、雪は津南町の地域性が形成された要因であるといえよう。

以上のようなことから、津南を 1 番魅せたい時期として、冬季間が最適であると考えた。

3-2.政策提言

以上のようなことから、冬季間の空き家を拠点とした雪アートプロジェクトを提案する。

具体的施策としては、大地の芸術祭冬の開催に合わせ、1~3 月に空き家を開放する。このとき、1 集落につき 1 件の空き家、1 つの雪アート作品を想定している。また今回、地域活性化という目的を達成するために、「アーティストは期間中その空き家に滞在すること」また「住民が参加し、空き家の雪下ろしで下した雪を使うこと」を条件とする。前者については後述があり、後者については現地ヒアリング調査にて下記図のような結果が得られたためである。

津南町ヒアリング調査		
雪について	理由	年齢・性別・職業
プラス	除雪技術が高い	80代女性・薬局経営
プラス	雪は観光の目玉	50代男性・酒屋
プラス	雪が経済を回す	50代女性・観光案内所
プラス	雪は有望な観光資源	40代男性・観光協会
プラス	除雪作業が雇用をうむ	30代男性・役場職員
プラス	雪が観光資源となる	40代女性・主婦
マイナス	除雪作業が大変	40代女性・コンビニ店員
マイナス	雪は捨てるもの	40代男性・弁当屋
マイナス	除雪費用の負担が大きい	40代男性・観光案内所
マイナス	除雪作業が大変	40代男性・会社員
マイナス	除雪費用の負担が大きい	40代女性・会社員
マイナス	除雪作業が大変	60代男性・観光協会
マイナス	除雪作業が大変、雪害がある	60代男性・自営業
マイナス	雪害がある	70代男性・農家
マイナス	除雪は財政面で負担	50代男性・役場職員

空き家の管理は役場が、現場の運営は有志の地域住民が主体で行い、アートに関する手続きは大地の芸術祭事務局が行う。また実際のアーティストと住民の仲介は大地の芸術祭のサポーターであるこへび隊が行い、アート制作及び空き家での交流にはアーティストをはじめとし、地域住民・訪問者・サポーター（こへび隊）が幅広く携わる。また財源確保に向けて公益財団法人雪だるま財団、NPO法人T a p、一般社団法人雪国観光圏、NPO法人越後妻有里山観光共同機構といった本事業に精通した既存の組織から成る「雪国活性化ネットワーク」を構築する必要がある。

アート作品の制作に関して、まず作品申請の手順として大地の芸術祭では、作品の設置希望場所を地域が大地の芸術祭事務局に申請→大地の芸術祭事務局が場所の選定・アーティストとの調整→決定といった流れが確立されており、採択の際に開催地域に重きが置かれているため、実現可能性は高いとされる。

空き家に関して、まず役場が主体となり、現在役場によって管理・公開されている町内の空き家の中から、その地域の現状や周辺住民とのコンタクトを通して対象となる空き家を選定する。このとき、その年の財政状況や地域状況により選定する空き家数は変動する。空き家の運営は有志の地域住民やサポーターがコーディネーターとなり、訪問客の多様なニーズに対応する。またその空き家で住み開きを行うため、外部からの訪問者が住むことやアーティストや住民とのコミュニケーションが実現し、幅広い交流人口の拡大に寄与することができる。十日町の事例調査より、降雪期間である冬季の訪問客は雪国に強い関心がある人だと想定できるため、小さい拠点でありながらもより強固なネットワークが形成され、その後の集落の持続的発展に寄与することが出来るのではないかと考えている。

広報発信については先述の「雪国活性化ネットワーク」組織のHPやSNSなどを利活用し広報を実施すること、コンタクトはシェアハウスのポータルサイト colish にて行うことができる。

これらを毎年続けることにより、空き家を拠点とした雪アートプロジェクトの有用性が広まり広域的な発展が可能となるだろう。

以上より、効果として訪問客の増加による交流人口の増加、付随効果として定住が期待される。また町内としては地域への愛着の創出による人口流出率の低下や地域への誇り意識の創出がおき住民の雪のイメージ進展につながり、活気溢れる町となるだろう。これは津南町の基本構想に掲げられたテーマである「住んでよかった・訪れてよかったと思えるまちづくり」に寄与できるといえる。

このようなことから総じてテーマ解題である「みんな雪のおかげ」に沿うことができる。

これらを通して住民にとって雪が魅力的なものになること、また津南町という地域が持続的に発

展することを願っている。

最後に、現地調査の際にお世話になった津南町の方々に心から感謝申し上げたい。

参考文献

- ・美術は地域をひらく 大地の芸術祭 10 の思想（北川フラム著・現代企画室・2014年）
- ・ひらく美術（北川フラム著・ちくま新書・2015年）
- ・大地の芸術祭<ディレクターズ・カット>（北川フラム著・角川学芸出版・2010年）
- ・ソーシャル&エコ・マガジン ソトコト（木楽舎・2016年9月号）
- ・津南町空き家調査概要（平成21年）
- ・平成20年住宅・土地・統計調査（総務省）
- ・津南町基本構想

<http://www.town.tsunan.niigata.jp/uploaded/attachment/1860.pdf>

（平成28年9月17日アクセス）

- ・津南町人口ビジョン

<http://www.town.tsunan.niigata.jp/uploaded/attachment/1763.pdf>

（平成28年9月17日アクセス）

- ・津南町HP

<http://www.town.tsunan.niigata.jp/>

（平成28年9月17日アクセス）

- ・津南町移住推進協議会HP

<http://www.iju-tsunan.jpn.org/top.php>

（平成28年9月20日アクセス）

- ・大地の芸術祭HP

<http://www.echigo-tsumari.jp/>

（平成28年8月29日アクセス）